
僕と逢との一泊二日

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と逢との一泊二日

【Zコード】

Z9040V

【作者名】

まなか

【あらすじ】

祝一期決定！！！ アマガミ!! 一期決定を祝して勝手に連載を始めました。

後輩である七咲逢と付き合い始めたクリスマスから半年。橘純一と逢は一緒に田舎に泊まりで旅行に行くことにした。初めて過ごす、一緒の夜 橘純一はいったい何をしてくれるのだろうか。

第一話「到着」

バスを降りると乾いた爽やかな風が僕らを包み込んだ。

「わあー！ やっぱ空気が違いますね」

バスが遠ざかった後、逢がそばに歩み寄つてくる。

「そうだね……やっぱり違うなあ……」

ん～～～と僕と逢は大きな伸びをした。

「先輩、一面緑の絨毯ですね」

「ん、ああ、そうだね。ここは米の生産地で有名らしいからね」

「へえ……詳しいですね」

「はははっ、ちょっと調べたらからね」

「そうなんですか。……それで今からどこに行くんですか？」

「んーと……」

僕と七咲逢は一人で旅行に来ている。ペアチケットが当たって田舎旅行なのだ。美也が悔しそうにしていたが、何かおみやげを置つてきてやると言つて出てきた。

「逢ちゃんに変なことしないでよー？」

美也のヒトコドガ思ひ出される。

ふつとこちらを見つめている逢の顔を見た。

……変なこと……。

「せ・ん・ぱ・い！ なにほーっとしてるんですか？」

「うわああっ！ ……『ごめん……』」

ダメだダメだ。今はこれからのことを考えよう。

えーと、行き先は……

「あの旅館みたいだね」

「あ、あの旅館ですか。近いんですね」

「僕と逢の距離のほうがもっと近いよ」

「変な」と言わないでください

「あ……あははは」

一蹴されてしまった。

僕と逢はその旅館の方へ舗装されていない道路を歩き始めた。周りの森からひやせミミガワソノワソノと鳴き続けていた。

第一話「到着」（後書き）

祝二期決定！！！

もう最高です。

明日学校なのにもう眠れそうにありません。

七咲がとにかく可愛くて七咲が欲しくて、七咲が（ry

第一話「門」

「ここですね」

僕と逢は大きな古い門の前に立つていた。

「へえ……なんかすごい歴史の有りそつなどいろいろだね」

「そう……ですね」

「ごめんぐださーい！」

僕は手を簡にして叫んでみた。

「先輩先輩！ やめてくださいよ！ 恥ずかしいじゃないですか！」

「えつ……？ ジャあどうせつて叫べばいいんだい？」

「そういう問題じゃなくつて……ほら、そこに呼び鈴があるじゃな
いですか」

七咲が指さす先にはその門には似合わないインターホンがついて
いた。

「待て、七咲。これを押すとこの旅館が吹っ飛んでしまうかもしれ
ん……」

「い・い・か・ら・ 早くしてくださいよ！」

「わ、わかったよ」

僕はそーっとボタンに指をかけた。

その時

第一話「門」（後書き）

「とにかくまなつかです。

いやー、夏真っ盛りですねー。

なんかいろいろ忙しくて小説を書いている暇がありません。
更新頻度は落ちますが、どうかご了承ください。

さて、ゲームの方のアマガミですが……
とうとう手放すことに決めました。

気がつくとそればっかりやっているので……

一応、スト子のBADENDまでは見ました。美也かつこ良かつ
たです。

そして七咲は最高です。

スカート捲りしたら泣かれて学校いけなくなりました。
変態紳士最高です。

梅原の行動に毎回泣かれます。あいつ……なんで彼女できない
んだろ。俺が付き合って（〃ｙ

さて、塾の宿題が溜まっているのでまた。

第三話「親友」

「お前……橘じゅねえか！」

「う、梅原つ？！」

「梅原先輩！？」

右 正門の横に付いている小さいもんから見慣れた梅原の姿が見えた。彼は和服を着ている。それがまた良くなじみっていた。

だが

「こ、これはまずい……。

「あ、ああ……そうこう」とか。まあ、入んな

「う、うん……」

僕と逢は顔を暫く見合せた。

「ふふっ……行きましょう、先輩」

「う、うん」

僕は少しの不安を抱きつつこの旅館の名前を思い出していった。

『梅原旅館』とい。

まさかね……まさかね……

「はははっ！」

「変なところで笑わないでください」と心持ひ悪い

「ひどい」

第四話「梅原」

「お……おお……」
門をくぐると大きな庭があつた。大きな池もあり、いかにも日本庭園という感じがした。外は暑かつたのだが、なんだかここは少しひんやりと感じる。

「先輩……涼しいですね」

「そうだね……」

「お一人さんとも気につてくれたかい?」

「あ……うん。ところであのさ、なんで梅原がここにいるんだい? やっぱり梅原旅館つて……」

「いやいや……ちばえよ。俺は寿司屋を継べることになつてんだよ。今日は親戚のうちの手伝いでここに来てんだよ」

「ああ……なるほどねー!」

「…………」

梅原がさつと僕の耳元で囁く。

「可愛い子がいるんだよ。昨日から泊まってるんだけど……」

「あはは……僕は逢……七咲がいるからねえ」

「おおつとやうだった。お前は……もつ……」

「…………」

梅原のふとした寂しそうな表情に僕は言葉を失つてしまつた。
去年の今頃と違つて梅原とあんな会話することは確実に減つた。お宝本も梅原にほとんどあげてしまつた。自然と梅原と接する機会が減つたような気がしていた。

「……いや、なんでもねえ。お一人さん」案内一つ!」

梅原はもとの明るさを取り戻すと僕らを奥の方へと案内してくれ

た。

第五話「和菓子」

「それでは、」ゆっくり！

梅原の威勢のいい声と共にふすまがピシャリと閉まった。

途端、静けさが部屋を覆う。

部屋は綺麗な和室だった。僕と逢は感嘆をあげた。

「いい部屋ですねー」

「うん、僕もびっくりしてるよ」

僕と逢は机を挟んで向い合って座布団に座った。

「先輩」

「ん、どうしたの？」

「どうかこいらへんを観光しませんか？」

「あ、うん！　いいよ！」

「あ、でも少し休憩してからにしましょ」

七咲はそういうと慣れた手つきで電気ポットに入っているお湯を急須に入れてお茶をこしらえてくれた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

すずーつ

「うん、おいしいよ！　さすが逢が入れると違うね！　梨穂子が入るのとは味が違うよ」

「梨穂子……って誰ですか？」

「ああ、僕の幼なじみで茶道部にいる……」

「あ！　あの人ですか。見かけたことがありますよ。でもさすがに茶道部の人より美味しいっていうのは……」

「うん、やっぱりいれてくれる人が違うと味も違うんだよ」

「そう……なんですかね」

「うんー」

逢は照れているのか顔を赤らめて湯のみをぐるぐる回していた。

すずめーつ

「あ、お菓子もありますよ」

「じゃあひとつもらおうかな」

「はー」

「ありがとウ」

逢から紙に包まれた和菓子を受け取った。

「ん、美味しいですよ」

僕も包装を破つて中のお菓子を食べてみる。

「ん、ほひいいね！」

口の中に広がるあまーい風味……。

「先輩、口に物を入れたまましゃべらないでください」

「うつ……！」

「やばい……喉に詰まつただー！」

「ゲホッゲホッ！」

「ちょ、ちょっと先輩！ 大丈夫ですかー！？」

逢がこつちにやつてきて背中をなすつてくれる。

「ほり、お茶ですよ」

逢がわしだしててきたお茶を飲むと少しは落ち着いた。

「ふー。危なかつたー」

「だから言つたじやないですか」

「はははっ、そうだね。これからは『氣』をつかるよ」

「もう、心配掛けないでください」

逢のやさしい心遣いが心に染みてきた。

るの部屋で和菓子のようにあまい時間が流れていた。

第五話「和菓子」（後書き）

こんなにちば、まなつかです。

今、アマガミ!!オリジナルサウンドトラックの『一人で抹茶を聞きながら執筆しています。
やつぱりいいですよねえ、日本の和つて。

書いていて気づいたことが。

アマガミに細かい描写は必要ないような気がします。
なんか会話だけで想像できる……そんな感じがします。
というより、七咲と純一の姿がみんなの頭の中に浮かんでいる
と思つんですよー。（浮かんでいなかつたらすいません）

と、いうことで宿題を放棄した僕はもう少し頑張っていきます。
それでは。

第六話「出発」

「そんじゃ、いつでらっしゃいー…」

「ああ」

梅原の威勢のいい声に押されて僕らは宿を出た。

「ん~！ やっぱり気持ちいいですね、先輩」

外に出ると涼しい風が僕らを包む。逢の綺麗な髪が風にたなびいた。

「それで、どこに行くんですか？」

「ん~、そうだなあ」

そういう感じで、さすがにすぐ田がくれてしまつだらう。そうなるとこの近くで……たしか

町並みを見ないか？

・ラブホに行かないか？

やらないか？

「ここいらへんの古い街並みでもみない？」

「あ~、それいいですね。行きましょう」

さつきの選択肢は一体なんだつたんだらう。

こうして僕と逢はバス停に行き、丁度運良く来たバスに乗り、次のバス停で降りた。

「先輩！ 見てください！」

逢の笑顔がそばにあるなら、僕はどうにでも連れていくだらう。

第六話「出発」（後書き）

「こんなに今は、まなつかです。
まさか、橘純一ラブホに行かないか？
を選択済みとは……おや
るべし。」

第七話「買い物」

僕らは「」に多くある古くからの酒蔵などを見て回った。

「へえ…… そういうものなんですか？」

「ははひ、なんか面白い形をしてるよね」

僕らは杉山を見ていた。

「ふわふわして気持ちよれりですよね」

「うん、そうだね」

「あつ、あつちのおみやげ屋さん見てもいいですか？ 郁夫に何か買つていかなーと……」

「うん、そうするか」

僕らは近くにある歴史が長そうな土産屋さんに入った。なにか懐かしいような匂いがする。

「先輩、これなんてどうでしょ？ つか？」

逢が手にしているのはストラップだ。

「」これは当地限定のイナゴマスクのストラップじゃないか！

「あ、そうです。郁夫にどうかなと思いまして……」

「うん！」これは喜ぶと思つよ」

「はー！ ありがとうございます。参考になりました」

「いやいや……」

僕も買おうかな……。

「すいませーん。」れぐださいーー

逢が店の奥にいる（ハズの）店員さんに声をかける。

「はあ、あ、い、」

しわがれたおばあさんの声がしておくから人影がやつてきた。赤いズキンで顔を隠している。なんか弱々しい。

「これ一つください」

「ああこれね……2890円だよ」

「えー?」

「はー……わかりました」

「ちょ、ちょっと待つてよ逢。いくらなんでも高すぎじゃないか?」

「へ? そうですか?」

「ちょっとおばあさん! ボッタクリじゃないですかね?」

「……」

「おばあさん?」

「……」

「おばあさん?」

「……」

僕と逢は顔を見合わせた。なんか氣味が悪い。

「あーっはっはっはー!」

「「えつー?」」

おばあさん（のはずの物）から聞こえてくるのはしわがれた声ではなく若い女性の声だった。

「いやーひつさしふりだねえ、橘」

「……もしかして夕月先輩ですか?」

おばあさんはずきんに手をかけるとそれを外した。

「いやあ……まさかこんなところで会つとはねえ!」

紛れもなく、夕月先輩だった。

「先輩、ここで働いているんですね」

「ああ、うちの祖母が倒れたからね。……で、そっちの子は彼女さん?」

「あ、はい。えーと……」

「七咲逢です。よろしくお願ひします」

「ああ、よろしく。私は夕月流璃子。おーいー 愛歌ー?」

「……熱々」

ついやつぱり此の一人はセツトなのか。

「……それで二人とも同じ大学に進学したんですか?」

「ああ、そうだよ。あ、七咲。320円だよ」

「あ、はい

払つてあげようかと思つたけどそれじゃあ逢からのおみやげにならないなと思つてやめた。

「……それがいい

さすが飛羽先輩。僕の行動なんておみとおしか。

いつして僕らはおみやげを買つた。

お茶でも飲んできなと言われたけど、日が暮れてしまつて僕らは店をでた。

静かな空気がこの街を包んでいた。

第七話「買い物」（後書き）

「とにかくは、まなつかです。

いや、やつぱりこの一人は欠かせないです。大好きです。此の一人。
個性的でなおかつ（「」
なんか七咲の出番が減ってるんで次回は……ヒツヒツ……！

お楽しみに！

第八話「Kiss in the shrine」

夕暮れ時。僕と逢は人気のない田舎道を歩いていた。そこはアスファルトで舗装されていなく、砂利道だった。ジャリジャリと心地良い感触が足の裏に伝わってくる。

「あ……」

「ん……？」

逢がなにかに気づいたように森のほうを向く。僕もそちらを見ていると生い茂った木の中になにやら石の柱が見える。

「あれって……神社ですよね？」

「ああ……そういわれてみれば鳥居に見えるね

「行きませんか？」

「うん！　いいよ」

僕と逢は鳥居をくぐって神社の中に入った。境内は広く、そして静かでどこか懐かしい感じがした。

お賽銭箱に五円玉をぽいと投げ入れて手を合わせる。

「……」

「……」

「……逢はなにをお願いしたんだい？」

「家族の安全と先輩と……もっと近づけるようにって

逢が恥ずかしそうに答える。

「へえ、僕も逢ともっと心の距離を縮められますよ!」

「先輩……」

「お、あのね……逢

「あ、あのね……逢

「はい」

「キス……しないか？」

「は、はいっ！？」

逢が答える前に僕が近づいていつて肩をつかむ。
「ん……」

そつと田を閉じて逢のやわらかい唇に僕の唇を重ねる。

「…………」「んつ…………」

甘い香りがする……。

「先輩……」

「ん！？」

今……今一 口の中に入っているのは……逢の……逢の……！

「んつ…………」

「先輩…… 大好きです」

ふわっと逢の腕が僕の肩を包んだ。

僕もそれに答えるように逢の小さな身体をそつと抱きしめる。

「僕もだよ、逢…………」

「私は…………とても幸せです」

神社の境内には静かにヒグラシが鳴き、遠くからは虫の綺麗な合
唱が聞こえてきた。

第八話「Kiss in the shrine」(後書き)

「んばんは、お久しぶりです。七咲です。じゃなくて純一です。

夏もそろそろ終わりですね。

まなか……そう、此の名前の由来……（以下略）

これからは受験受験……大変です。

だけど創作活動は辞めたくありません！

というか七咲が可愛すぎでなにかに田代めそひ。

アマガミ……早く一期やつてくれ――――！

僕もこんな恋愛がしたかった……
それでは……

第九話「お・風・呂 with 梅原」

日が沈んだ頃、僕と逢は旅館に戻ってきた。梅原が迎えてくれた。

「すまん、梅原。風呂はもう湧いているか？」

僕が尋ねると梅原はふつとため息をついて

「ああ、そつちの廊下の角を曲がったところにある

「どうもありがとう」

流石に梅原は事情をよく理解していくれる。ありがたい。

僕と逢は一旦部屋に戻つて風呂の準備をしてから部屋を出た。

「それじゃあ、僕はこっちだから」

「先輩、覗かないでくださいよ」

逢がニヤニヤしながらそう言つてくる。またか……僕がそんなことをするとでも思つてるのだろうか。

「その……私は別にいいんですけど、他の人がいるので。先輩が捕

まつてしまつたら私、悲しいですから」

「いや……！ 僕はそんなことしないって！」

「だといいんですけどね」

そう言つて僕と逢はそれぞれ行くべき場所へと向かつた。

「よう大将！」

「う……梅原？！」

「なんだよなんだよー、まるでなんで従業員が普通に風呂入つてん
だつて顔してわ」

「い、いや……」

確かにそうだけど、なんでこいつタイミングを図つたようこいるん
だよ。

僕はすでに梅原が入つてゐる温泉に入った。岩風呂でなかなかい

い雰囲気が出ていた。

僕と梅原以外の人はいなかつた。

「ふう……いい湯だな」

「ああ、うちの自慢の露天風呂だからな。もつ暗くなつちまつてるとが、さつきまでいい眺めだつたんだぜ。夕日が田の前で山に沈んでいつてなあ……」

「そなのがあ……見たかつたな」

チャポンと僕はタオルを岩に投げて乗つけた。

「それで……七咲とは……」

「ああ……うん。前にも言つたとおりクリスマスの日からずっと付き合つてるんだ」

「へえ……それでねえ……」

梅原はやれやれこつやつて泊まりで旅行なんてお熱いこつたとつぶやいて田線を上に向けた。

僕もつられて上を向くと夜空には満点の星空が見える。

「綺麗だな……」

「ああ……」

「なあ」

「ん?」

「梅原はその……」

その先は続けることが出来なかつた。

「あーあー！俺も彼女ほしいなあ！」

梅原はキラキラ輝く星空に向かつて嘆ぐ。

「ははは……」

大丈夫さ、梅原にもきつと……

「そんで……七咲とはどいままでやつちまつたんだあ？」

「いつー？」

突然そんなことを訊かれては困つてしまつ。
「ど……どこまでつて……そ、そりゃあ……」

「そりゃあ……？」

「は、あはははははははは！」

「へいへい。お熱いこつた」

「ははは、「めんよ梅原」」

「いいくてことよー。俺はいつも新たな出会いに向かつて突っ走つてんのさ」

「いつもズッコケてるけどな」

「そ、それを言つなつて！」

「あははははははは！」

男子風呂からは一人の愉快な笑い声がずっと響いていた。

梅原に幸せあれ……

第九話「お・風・呂 with 梅原」（後書き）

こんにちば、まなつかです。

二期の放送開始が、来年の一月からつていつ噂ですね。
しかもタイトルが『アマガミSS+(Plus)』
楽しみで仕方がありません。

なんかアマガミSSのビジュアルファンブックがほしいです。
めちゃめちゃ欲しいです。

しかし買ったところで置き場所に困るんですよ。

美術設定とかメチャほしいのに……

妹をどう陥落させて置き場所をGETするかが課題です。

それではもう残り短い夏休み！

皆さんにも青春あれ！！！！

それではっ！

第十話「お・風・呂 with 逢」

「やれ……やつとひとりでくつろげる」

梅原はまだ仕事があるとかで風呂を出て行つた。

「ふむ……ここには混浴はあるのか……」

「い、これは……！ 入るしかない！」

「ま、まあ……し、仕方ないよな。もし、そんなことがあつても……」

僕は一度上がつて着替え、その隣にある『混浴』と書かれた魅惑ののれんをぐぐつた。

「……！」

さつと脱衣所を見渡す。

「さすがに誰もいないか……」はあ。

まあ、せつかく来たんだから入つていくとするか。身にまとつていた着物を脱ぎ、かごの中に入れる。カラカラカラ

……とドアを引くと

「せせせせせせ……先輩！？」

「なつ、逢じやないか！」

逢が一糸まとわぬ姿で温泉に浸かっていた。

これは……すごい……

「み、見ないでください！」

「ええっ！？」

逢はふいと僕に背を向けてしまつた。

その背中も可愛らしい。

「逢……入つてもいいか？」

「好きにしてください」

僕はそつと湯船に足を入れて

「ぬおつ！？」

足を見事に滑らせた。

「先輩！」

「うわあつ！」

ザツパ———ン！！！

水しぶきを上げて前のめりに湯船に突っ込む。

まずい。死ぬ。

「先輩！」

ぎゅっと田をつぶつた。

そしてふんわりと優しく僕を包む感触。

「はあ……はあ……」

「だ、大丈夫ですか？」

逢が、僕を受け止めてくれた。

「う、うん！ ありがとう！」

いろいろな意味で！

僕は逢の胸で受け止めてもらっていた。

小さいながらも柔らかい……。

「ひやつ！？ 先輩！ ちよ、ダメですってー！」

「わわつ、『めん！』

僕はさつとヤバい状況だということに気づき、逢から離れた。柔らかな感触が名残り惜しい。非常に名残り惜しい……！

「もう……先輩のエッチ

「ははははつ！」

「ははははー、じゃないですよもつー！」

逢は真っ赤になつてそっぽを向いてしまった。

「…………ほんとにエッチな先輩なんですか？」

「ははははつ！」

やばい……やばいぞ、橘純一！ 逢に罵倒されるたびに下のボルテージがMAXに近づいていくぞ……！

「静まれ……静まるんだ……」「…………み…………」

「な、何いってんですか！」

「ははははっ！」

困ったときの『ははははっ！』頼みだな！

その後なんとか収まった。

危なかつたあ……。

第十話「お・風・印 with ハ達」（後書き）

「んにちはー、まなつかです！」

これからは是非ともポルノ野郎と（）

いや、これってありなかなつて思いながら書きました。
R-15に指定するべきなのか……はたまた別のところでR-18で
連載すべきなのか……。

それでは。

第十一話「料理」

結局あれからちょっといろいろあってから風呂をでて、部屋に戻つたのが8時だった。

「先輩」

「んー、どうしたー?」

僕は寝転がりながら備え付けのテレビをぼーっと見ている。

「夕飯つて、どうするんですか?」

「いや、そろそろ帰ると遅いつよ…… プツ……

なんだよこれ……!」

「先輩? ここまで来てテレビですか?」

「あ、う、うん……ごめん」

「もう、じょうがないですね」

「はは」

「へい! お待ちつ!」

威勢のいい声と共に戸がガタンと開き、梅原が入ってきた。

「夕飯の……」

「寿司……なのか?」

「んな馬鹿な。ここは山だぜ? 新鮮な山菜や川魚の料理だ」

「うわあ……! すごいですよ先輩!」

テーブルの上に次々と色とりどりの懐石料理が運ばれてくる。逢は田をキラキラさせてそれを見ていた。

「おお……たしかにすごい」

「すごい……すごい……! 料理を覗き込む逢の胸元がはだけ

……t

「先輩、どこ見てるんですか!?」

「ええつ!?

「おいおい大将……」

「い、いや……あはは……」

「もう……」

逢が恥ずかしそうにゆかたを整えた。

してその場を去つていった。

「さて 食べますか！」

「うん、いただきまーす！」

梅原は「やつれくつ」と言い残

第十一話「ユキサイド」

「ふーっ、美味しかったですね」

「そうだね」

僕達はあれだけ会つた料理をほとんど平らげてしまった。やはり、子供の僕らの口には合わないものもあつた。だけど逢は満足そうに笑みを浮かべてくつろいでいた。

「逢、旅館といえばなんだ？」

「えっ！？ いきなりクイズですか？」

「そうだ」

「んー」

田を畠に漂わせて逢は考える。

「あっ、おいしい料理と温泉ですかね」

「ちがあ———う！」

「え……」

間抜けた表情で僕を見つめた。僕はつい立ち上がりてしまう。

「旅館と言つたら浴衣！ そしてスリッパ！ そして卓球だ！ 卓

球をしよう！」

「ええ！？ どこからそんなふうにつながるんですか！？」

「ふつふつふ、僕の腕をナメるなよ」

「いやいや、そんなコト言つてないです！」

「それじゃ行こうか」

「聞いてくださいよ！」

僕は一方的に逢の手を握ると廊下へ出た。廊下は浴衣を着た家族がわいわい楽しそうに話していた。これから温泉だろうか。いや……卓球かもしれない。それだったら卓球台がとられてしまつじやないか！

「行くぞ！ 逢！」

「ひえっ！ ちょ、ちょつと先輩！」

「……焦る」ともありませんでしたね」

十一

この旅館に卓球台はない そういうオチだつた。僕と逢は仕方なく販賣機で飲み物を買って休むことにした。

「あつ、この濃厚！ わんぱくバナナ美味しいですよー

「ははは、いんなどうにもあつたんだ、それ

学校の自販機で買ってひどい目にあつたつけ……もう飲みたくない

いものだ。逢はよく飲めるなあ。

「先輩は……なんですか、それ」

「ふつふつふー、これはだな『エキサイトオレンジ』だぞ」

「なんですか、そ

一
飲んでみる

卷之三

あつ、これつて間接キス

「マズっ！」

「ええ――！？」

「な、なんなんですかこれは！」

「な、何つて……『エキサイトオレンジ』だよー。」

「なんかすゞい口の中がエキサイトしちゃつてますーー。」

「それがいいじゃないか！」

こうして僕と逢は飲み物を飲んで休憩した。ははは、楽しかった

第十―話「Hキササイト」（後書き）

ははは、なんか試験終わって楽しいです。
ここにちは、まなつかです。

なんかこうしてずっと小説を書いていたいです。将来作家になりたいですが、きっとその道は険しいので普通の職業に就きます。
感想・評価がありましたら遠慮なくどうぞお寄せください。

それでは。

第十一話「一触即発！？」

「先輩」

「んあー？」

僕はテーブルの上にあつた避難経路を示す図をぼんやりと眺めていると同じくこの旅館のパンフレットをペラペラめくっていた逢が嬉しそうにテーブルの上にパンフレットを置いた。

「どうしたんだ」

「見てください、これ」

「……庭？」

「そうです、こここの旅館には庭があつて夜になるとライトアップがあるみたいなんですよ！」

「へえ……いいじゃないか」

僕は立ち上がり逢の手を取った。

「じゃあ、一緒に行こうか」

「はい！ 行きましょう！」

僕と逢は地図にしたがつて旅館の中央の方へと向かつていった。

「ここに大きな庭があるらしい。どんなものか僕も見てみたい。

「あ、あの人って……」

逢が立ち止まってロビーの方を見る。僕もそつちのほうを見た。

「え

「あ、あの人は……否、あのお方は……！」

「逢！ 逃げるぞ！」

「えつ！？ は、はい！」

まさかこんな所に綾辻さんがいるなんて！ 去年手帳を拾つてか

ら恐ろしい目にあつて逃げ続けている。なんでもその手帳を見たものは学校にこれなくなるとか……。

僕は逢の手をぎゅっと握った。彼女はえっ？ という表情で僕を見上げた。大丈夫、僕は死なない。逢がいる限り というかなんでこんな所に綾辻さんがいるんだよ。まあいい。関わらないように逃げよう。

「逢、愛してるからな」

「シャレですか？！ 本気ですか！？ つていうか、先輩死なないでくださいよ！」

僕らは庭園に向かつて急いだ。

そう、鬼から逃げ惑う人の様に

第十三話「一触即発！？」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

綾辻さんは裏表のない素敵な人です！

感想・評価、待つてます！それでh

第十四話「庭にて」

「はあ……はあ……なんとか着きましたね」

「ああ……」

僕たちは必死になつて走つてきたので息も切れ切れだつた。だけど

「……綺麗……」

「そうだね……」

逢がゆつくりと身体を起こした。そして僕の方をすっと見つめる。「先輩と来れて良かつたです」

逢は可愛らしくにこりと笑い、僕の腕に自分の腕を絡めた。「僕も逢と来れて本当に良かつたよ」

日本庭園は静かで、木々がライトアップされていたりしていた。ほかにも何組かカップルが見える。

「先輩、ちょっと屈んでもらえますか？」

「あ、うん……」

なにをされるのかは予想がついた。そり、この雰囲気、キスしない！

「かたぐるましてください」

「へつ……!?」

屈んできたから逢を見上げながら僕は素つ頬狂な声を上げた。かたぐるま……？

「いいじやないですか～」

逢はちょっと恥ずかしそうにもじもじしながら僕におねだりをしてくる。……か、可愛い。

「しょ、しょうがないなー。ほら、いいよ」

僕は背中を逢に差し出した。

「えい！」

逢が僕の背中にぴょこりと飛び乗った。暖かい感触と、微かに柔らかい感触を感じる。暖かい吐息が首もとにかかり、少しくすぐつた。

「よつ！」

僕は一気に立ち上がった。

「わあ……ここから庭が一望できますー！」

逢は嬉しそうにそう言つた。

「僕は見えないから僕の分まで観ておいてくれよ

「えへへっ、わかりましたよー」

逢はうれしそうに笑いながら庭を堪能していた。僕は僕で逢の足の感触や……まあ色々堪能した。

第十四話「庭にて」（後書き）

こんばんは、まなつかです。

今回のお話は新しく買ったNECのLifeTouch Noteを使って書いています。

いやー、キーボードがあるとなかなか便利なものですね。まあ、今までパソコンでそっちの方が便利でしたけどね。

それでは。

第十五話「クラスメイトの嫉妬」

「あつ……」

逢が僕の肩の上で小さな悲鳴を上げる。
ん……なんだろうか……んんつ！？

「こんばんは、橘くん」

「あ、綾辻さんっ！？」

浴衣に身を包んだ僕が世界で一番おそれている少女がそこで不気味な笑みを顔に浮かべていた。やばい。

「あ、綾辻さんもここに来ていたんだね」

とりあえず無難な話題を振つておこづ。僕は逢を下ろしながらう言つた。

「それカノジヨ？」

話聞いてねえ――――！？

「は、はは。まあ……そうだよ」

「ふうーん、こんな人もできるのね」

「ちょ、やめてください！」

逢が叫ぶ。日本庭園が一瞬静かになつた。

「先輩はいい人なんです。あなたは何か誤解しています！」

「……」

綾辻さんはジロリと僕を一瞥してからヒヒヒヒと花のような笑顔を浮かべた。

「なーんてね。ごめんなさい、あなたたちが羨ましかったからついついイジメなくなっちゃつたのよ」

(先輩、この人怖いです)

逢が「オホホホホホホホホホホ！」と高笑いしている綾辻さんを見てこつそり僕に耳打ちした。

(はははっ、確かにそうだけ見かけはいい人だよ)
(結局中身ダメじゃないですか！！！)

「ま、一人のムードを邪魔ちやつてごめんなさいね。私は家族でここにきたのよ。毎日センター試験の勉強でストレスがたまっていたからいい気分転換よ。それじゃあ、ごゆっくりね」

「あ、うん……」

綾辻さんはそれだけ言い残すと颯爽と庭園を出て行った。

「先輩……クラス、大変そうですね」

「なんで一年連続になつたんだろうね」

「……先輩、今度は私が何か奢つてあげます」

「えつ！？ どういうこと？」

「なんだか邪魔されて先輩すねちゃつてますから」

「う……」

やつぱり僕は顔に出やすいのかなあ……。

「じゃあ行きましょう、ほら、そこに抹茶を手軽に楽しめるといいがあるんですよ」

「えつ、じゃあ行つてみようか」

「はい！」

逢はにこりと笑つて僕の手をその小さな手できゅつと握つた。僕もその柔らかい手をきゅつと握り返した。

第十五話「クラスメイトの嫉妬」（後書き）

こんなに泣き、まなつかです。

いや、なんかすごい暴風雨でして学校が休みになっています。
みなさん、暇つぶしに小説でも読んでみては？
感想もお待ちしておりますのでどんどんお寄せくださいー。

第十六話 「一人で抹茶を」

「へえ、すごいね。結構本格的な感じだよ」

「ええ、そうですね……」

庭園の一角にはいつか茶道部で見たようなセットがあつた。
そこで一人の女性が着物を着て抹茶を点てている。

「無料ですよ。いかがですか?」

「はい、ぜひともお願ひします!」

そう張り切つて答えると逢がつんつんと僕のわき腹をつついてきた。

(何デレデレしてんですか!)

(誤解だよ! してないって!)

逢はふーっと膨れてしまっていた。可愛いなあと思つ。僕と逢は赤い布がかぶせてある椅子に腰をかけた。

「どうぞ」

女性が一人分、お茶とお菓子を出してくれた。僕らは礼を言つてから受け取り、抹茶を一口飲む。

「……………逢?」

「……………先輩」

「あはは……」

苦かつた。なんていうか、これが日本の美つて奴ですね!
甘い和菓子でなんとか飲みきつた。

「なかなか普段できない経験ができましたね」

「うん……そうだね」

「いい経験だったよ。うん。」

「たーちばーな先輩

「ん？」

逢が僕の腕に自分の腕を絡ませてきた。

「そろそろ戻りましょう

「そうだね、もう遅いや

僕らは庭園を後にした。途中綾辻さんごめんなさいとではなく、無事に

部屋まで帰ることができた。

第十七話「問い合わせの時」

僕らは部屋に戻つて他愛もない話をしたりした。学校のこと、友達のこと、美也のこと……。気がつけばもう一時を回っていた。

「逢、そろそろ寝ないと」

「あ、……はい……そうですね……」

急に逢は顔を朱く染めて下ばかり見てくる。

「どうしたの？ あ、トイレ先使つていいくけど」

「ち、違うんです……！」

ぱつと顔を上げてそしてまたすぐに戻す。

ん~。こいつこれはどうすればいいんだ……あ、もしかして！

一緒に寝ようか？

熱い夜を一緒に過ごさないか？

寂しいの？

困った。

どれも素晴らしい。

「寂しいの？ 一緒に寝ようか？ 热い夜を一緒に過ごさないか？」

「へつ！？ はいっ！？」

逢はさらに顔を赤くして僕を驚いたまなざしで見つめる。赤い逢もまた可愛いものだ。

「逢……」

僕は近寄つてその赤い逢の頭を撫でた。綺麗な髪だな、と思つ。

わいわいしてて気持ちがいい。逢は俯いたままだった。

「……たし、」

「ん？」

「私、先輩と一緒に布団で寝てもいいですか？」
逢が目だけをこちらに向けて尋ねてきた。

「うん、いいよ」

「よかつた……」

「それだけのことなのにどうしてそこまで……？」

「いえ、子供らしく思われてしまつのはと懇意にして……」

僕は逢の頭から手を離して畳に手を突いた。

「はははっ！ そんなこと思わないよ。逢はいつも大人びているじゃないか」

「そうですか……？ あ、でも先輩よりかはそうかもしません」

「はははっ……」

笑うしかなかつた。

第十七話「問い合わせの時」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

最近更新頻度が落ちていますが、やはり受験勉強が結構あつて大変なんです。ご了承ください。

さて、この物語も一泊二日ですのでそろそろ次回予告でも。

橘「次回予告っ！」

美也「嬉しそうだねーにいに」

橘「はははっ！ 七咲との旅行はすごい楽しいぞ！」

美也「うわー！ にいにだけするいよー！」

橘「ははっ、だけどこんな楽しい話も後少し。この小説が完結したら次は梅原が主人公のお話だ」

美也「ウメちゃんの？ あ、また鬱小説でしょ」

橘「僕と七咲がクリスマスに温泉を満喫しているとき梅原は香苗さんに思いを伝えていた。それはとても悲しい話の幕開けだった」

美也「うわっ、何それっ！？」

橘「……………次回、今回の小説のサイドストーリー『（タイトル未定）』…」

美也「未定なの！？」

橘「お楽しみに」

まなつか「それでは、また今週の火曜日にお会いしましょう」

＝ 提供 ＝

日々平和

（鬱な未来を切り開こう！）

第十八話「告白」

「それでは電気消しますね」

「うん」

この部屋に並べた布団は一枚。特に夏だから風邪を引くなどの心配はないだろう。僕は仰向けに寝転がつたまま逢が隣に来るのをドキドキしながら待っていた。

「先輩」

「ん?」

「えっと……その……」

「大丈夫、おいで」

「はい」

逢が隣に寝転がる。近くに体温を感じる。「こんなにも近くて、愛おしい。そんな存在が逢だつた。僕は彼女が一番大切だ。ずっとずっと大切にしていきたい。

「逢」

緊張した空気がこの部屋を満たしていた。だけど一人にとつてそれはとても気持ちのいいことなのかもしない。耳を澄ませば近くの田んぼからカエルの合唱がここまで聞こえてくる。そしてすぐ近くで逢が呼吸をする音も聞こえてくる。

「な、なんですか、先輩」

「ずっと……ずっと、これからも逢のこと好きだから」

途端にカエルの鳴き声が止んでしんとした時間が流れれる。

思わず息をのんでしまうほど静かだった。

隣に逢がいる。それだけが何故か儂く、寂しかった。

「どうしようもないくらい不安で……はは」

「先輩……」

逢はそつと顔を僕に重ねた。

そのキスは特別だつた。

「大丈夫です」

「失いたくない人が、この世で一番大切な人ができるのは初めてだよ」

「……先輩、それって私以外の女の子にも言つんじゃないんですか？」

「そんなことないさ、逢」

僕は上半身を起こした。いつの間にか月が出ていて逢に僕の影を落とす。

「結婚しよう」

「えつ……？」

第十八話「告白」（後書き）

「んこちは、まなつかです。

なんだか段々文章が重たくなってきていますね。
やっぱり場面に気合いを入れるとどうしても「ライトノベル」にならないんですよ。

それとお詫びを。

梅原が主人公の話ですが、ちょっとあまりにも残酷すぎる内容です
のでアマガミの一次創作としては書かず、オリジナル小説として
投稿します。興味がある方は是非。

それでは、来週もまた。

第十九話「旅の終わり、新たな始まり」

大きく見開いた逢の瞳。
その瞳に迷いはなかつた。

「先輩、こちらこそお願いします」

「逢、ずっと大切にするね」

「はい、もちろんです」

僕は逢を押し倒した。

月光に照らされた逢の表情は微かに微笑んでいた。

「かまいませんよ

深く口づけを交わし、どこまでもお互いを知ろうとした。

重ね合つた身体、逢の吐息、うめき声。

時折見せる逢の表情はたぶん、僕と同じだったと思う。

ああ、これが幸せか。

二年と半年前からこれだけ僕は変わった。

人生なんて努力次第でなんでも変えるものだと僕はこのとき初めてわかった。

翌朝、汚れてしまつたシーツを梅原は何も言わずに持つて行って

くれた。さつとこの部屋に割り振つて貰つたのも彼の配慮だらう。

「先輩、準備できました」

「うん、それじゃあ行こうか」

僕と逢はいろいろな思い出が詰まつた旅館を後にした。

外にでるとああやつぱり夏だなって思つ。

蝉は僕らに飽きたせずに同じ声を聞かせていた。鳥は氣持ちよさそうに川で水浴びをし、子供たちは虫取り網を持つて森を駆け回つていた。

「楽しかったですね」

逢はやつぱりちょっと疲れた表情でバスの窓の外を見ながらそう言った。僕はその姿を見て少し安心した。

僕らはきつといつまでも、この夏が終わっても、一緒だらう。

強い日差しと車内のクーラーの音がまだ夏だとこいつことを示している。

「どこか寄り道していかない？」

逢はここにいる。僕の隣に。ずっと、いつまでも

終わり

第十九話「旅の終わつ、新たな始まつ」（後書き）

「こんばんは、まなつかです。

ものすじに断腸の思いでの最終話の執筆でした。
まだまだ書いていたかったです。
だけどこの19話の19とこう数字。

「イク」と「行く」をかけてこむとこいりとせ（「」）

はい皆さん朗報です！

今回の話のノンカット番がなんと公開決定！

逢と橘さんの生々しい描写が（あきよひ「やめのひー」まなつか「ぐつほひ」）

……とこう」と次回からアマガミの一次創作の筆は一日置かせていただきます。

アマガミの一期（アマガミの一期と書つそつですが）
を楽しみに待ひつつ、勉強に専念するところにつづ小説を書いていきたいと思こます。

「ほんとせ七咲じやなくつてあの子の小説を書いてほしかった！」

「梅原×橘で書いてくれー！」

「何言つてんだよ！ 橘×ウメだらー！」

「つーか更新停止している小説早く書けよー！」

「18禁ー 18禁ー！」

などの一意見・一感想があつましたらじやんじやん送つてください。

（「」の物語はハクションです。実際の七咲逢、変態紳士、寿司屋の

息子、綾辻さんは裏表のない素敵な人では存在しません）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9040v/>

僕と逢との一泊二日

2011年10月10日03時15分発行